

讃美歌 191 「いとも尊き」

1

いともとうとき 主はくだりて
血のあたいもて 民をすくい
きよきすまいを つくりたてて
そのいしづえと なりたまえり。

2

よものくにより えらばるれど
のぞみも一つ わざも一つ
ひとつのみかて ともに受けて
ひとりの神を おがみたのむ。

3

さわのあらそい み民をさき
よびとそしりて なやむれども
かみはたえざる いのりをきき
あみだにかえて 歌をたまわん。

4

世にのこる民 さりし民と
ともにまじわり 神をあおぎ
とわのやすきを 待ち望みて
きみの来ますを せつにいのる。

説教 「天に名を刻まれて」(要旨)

「弟子たちは自分たちが主の名前を用い、主の名によって悪霊たちが追放されるのを目の当たりにした。それに対して主は、自分たちの名が天に記されていることを喜べと言われた。名は人生であり人格である。互いを呼び合う我々の喜び、拠り所、希望はそこにある。」

しかしこの名は、地上では、失われて行く。記憶からも、記録からも薄れていき、意味のないものになってしまふ。天に記されている名は、失われることはない。なぜなら、イエス・キリストの名を信じたものはその名に連なっている。」

祈 祼

讃美歌 532 「ひとたびは死にし身も」

1

ひとたびは死にし身も
主によりて今生きぬ
みさかえのかがやきに
つみの雲きえにけり
(くりかえし)
ひるとなく、よるとなく
主の愛にまもられて、
いつか主にむすばれつ
世にはなきまじわりよ

2

主のうけぬこころみも
主の知らぬかなしみも
うつし世にあらじかし
いずこにもみあと見ゆ

3
ひるとなく、よるとなく
主はともにましませば
いやされぬやまいなく
さちらぬ禍（まが）もなし

献 金

讃美歌 544 「あまつみたみも」

あまつみたみも 地にあるものも
父、み子、みたまの 神をたたえよ、神をたたえよ。 アーメン

祝 祼